
秘密のダーリン

天人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秘密のダーリン

【Nコード】

N5837Y

【作者名】

天人

【あらすじ】

桜井 蜜 16歳 高校1年生

まだ恋愛を知らない。夏休みに入りバイトに明け暮れるが…
そこに出会いが転がっていた

プロローグ(前書き)

小説初めて書きます！ドキドキですね〜^^

プロローグ

恋愛なんて興味がなかった

でも街中で見かけるカップルは

観察するのが楽しい

だって、見てるだけでこっちも

幸せおすそ分けしてもらってる気分になれるでしょ

まあ中には

そうじゃない人もいるけどね

趣味を聞かれても他の人と変わらないよ

読書と人間観察

あとは隠れてお酒を飲むこと

桜井蜜 - さくらい みつ - 16歳

今年高校に入学したて

周りは恋愛で盛り上がってるけど

まだ

私はしたことがない

羨ましいけど、聞いてるとたまに

うんざりする。

よく

「蜜も恋しないと!! もたいない!!!!」

って言われる

まあ・・・よけいなお世話だ

自分では、あんまり外見を気にしてないが

友達いわ可愛い部類に入るらしい

染めてない真っ直ぐな黒髪

パツチリ二重の目 うん。これは自分でも気に入ってる

でも、恋愛つてするものなのかな・・・

私は無理に彼氏を作ろうとは思わない

合コンなんて・・・行ってみたいけど

バイトしてる方がお小遣いになるしね

出会うなら・・・平凡な優しい人がいいな

なんて

思って過ごしてたり

1学期はそろそろ終わり

もうすぐ夏休みが始まる

バイト・・・ガンガンいれるぞ!!

って思ってる私

まだこのときは

まったく予想できなかつた

これから私のとりまく世界が

変わっていくことを

ピ・・・ピピピ

頭の上で携帯のアラームが鳴り響く

朝かゝ ってか明日から夏休みじゃん

起きて終業式に出ればおｋだ

蜜はモゾモゾと起きだした

寝起きはそんなに悪くはない

学校に行くと皆、夏休みの話題で盛り上がったた

「おはよゝ」挨拶しながらカバンを机に置きに行く

「あ！蜜〜おは〜」私の姿を確認して仲良しの加奈がやってきた

加奈は中学の時から友達

比較的深く狭くをモットーに友達を作っている為、貴重な存在だ
まあ、自分が人の好き嫌いがあるだけなんだけどね
浅い付き合いの子もいるけど、

なんでも話せるのは、この高校ではまだ加奈だけだ

「ねえ、蜜は夏休みバイトでしょ？ でも空いてる日遊びたいな〜
！！ 海行こうよ！！」

海ね・・・あまり露出は好きじゃない

けど加奈とは遊びたい

「ん〜まだシフト決まってるから、連絡するわ」

ニッコリ笑って返しといた

そろそろ講堂に行く時間

「ほら、加奈行くよ」 軽く促しながら移動する

加奈はブツブツと「蜜もつたない。早く彼氏作りなよ〜」って

内心またかって感じたけど聞かなかったことにする

最近、加奈に彼氏ができてから毎日のように言ってくる

長い校長の話が終わり、ホームルームも無事終了
成績もそんなに悪くなかった

これで夏休み中バイトに明け暮れても文句は言われないうら
早くあの家を出たいから必死にバイトしてお金をためている

「加奈、バイトあるから先帰るね！彼氏によろしく」

私はそう言って教室を出て行った

「マスター、おはようございます！〜」

私は店のドアを開けながら言った

働いているところは隠れ家的な、落ち着いた雰囲気のカフェだ
若い子はほとんどいない

お忍びで結構来てる人たちはいるみたいだ
芸能人ってやつがね

私は興味がないけどさ

だからかね、マスターに気に入られて雇ってもらえてるのは

「お！蜜ちゃん、おはよう。今日もお願いね〜」

マスターが私を確認して笑顔で言ってくれた

実はマスターもモデルの仕事をしていたらしい

なので、かつこいい

でも場所も地下で注意しないとわからない所にあるため知ってる人
しか来ないみたい

マスターいわく 芸能人のお店 だとか・・・

よくわからないが時給もいいし楽しいからやりがいがある

そこで

「蜜？って八チミツの〜??」

って声がした

めずらしい 若者だ

振り返ってビックリした

男の子をキレイって思ったのは初めてだ

1 (後書き)

.....

#2 (前書き)

すんごく間あっちゃった・・・

#2

なんだいきなり・・・

「はい？　そうですけど？」

まあね、一応接客業だからね　愛想よくしますよ
美形だし・・・目の保養　ありがとうございます

美形君はやたら近づいてきて・・・いや・・・近いです。
息がかかります。

「・・・なにか？」って聞きました。ええ。
無駄に美形な人に近寄られても良いことないしね。

「み〜つ〜ちゃん？　眉間皺よっちゃってるよ〜　可愛い顔が台無し〜」

とっかって手！いらん！！って
とっさに振り払っちゃった。

「あ・・・」

うん。あ　しかでない。なんでか謝りたくない。
マスター助けてください。

そう思ってマスターの方向いたらニッコリしてた。今日も素敵な笑顔です。

じゃなくて！！

「え〜 お客様申し訳ございませんでした。」ってペコってしたよ
お・と・な！！ 私偉い！！！！

なのに美形君はまだ絡んでくる

「大人びてるけど高校生だよ〜その制服とか」

なにが言いたいのかしら・・・

まあシカトだ。カウンターの皿でも洗ってるか。
そんな感じで戻ったらマスターが少し驚いて

「もう話なくていいの？」 って

なにを？ って顔に出てたんだろうな・・・

「やっぱり蜜ちゃん雇って正解！ あいつにも揺らがないなんて！
！」

あ・・・やっぱりし有名人でしたか
まあ興味ないがね

「何？俺知らないの？？ まじで？」

せっかくカウンターに隠れてたのに美形君はやってきた

「どなたでしょうか？」 ちょっとだけ冷たく言ってみた

ニヤって美少年が笑って

「教えたらご褒美もらうからね」って

焦らされてもな〜 って時計みたらいい時間

よっし！

「マスターおつかれさまでしたー」

にっこり笑ってバイバイだ！後ろから「おい！！」って聞こえたけど
知らんがな。さらばだ美少年よ

そんなことを思いながらルンルンで家に走って行った。

この後、大事なことに気づくまで

#2 (後書き)

うゝ文才がほしい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5837y/>

秘密のダーリン

2011年12月11日23時00分発行